教職支援室便り（９月号）

令和７年　９月１２日　（金）
文責：教職支援室　曽我文敏
☎０９８５－２０－４８０８

「夏季教職特別講座」終わる

５月１３日（火）にスタートした「夏季教職特別講座」が、８月１２日（火）に終わりました。この間、授業と並行して行った期間を含め、１３週間の日程で行いました。そして、「教職特別講座」もスタートして、もうすぐ１年になります。これまで、１５０コマ（１コマ９０分）以上の演習の中で、学生の皆さんは自己啓発を図りながら、教員採用選考試験（筆記試験・面接試験等）に関する演習を多面的・多角的に行い、教員になるための基本的な知識や技能等を習得するとともに、教員としての資質・能力を高めてきました。人としての内面的な資質（誠実さ、協調性、コミュニケーション力、学び続ける姿勢等）」や、教員としての専門性の基礎（児童生徒理解力、授業力、教育的愛情等）」を、教職教養、専門教養、面接、模擬授業、小論、集団討論、グループワーク、場面指導等の演習の中で培ってきました。担当者としては、「この『教職特別講座』は、試験合格のためだけにあるのではなく、学生の皆さん一人一人が、教員になりたい自分を見つめ続ける学びである。」と考えます。

下欄に、第二次試験を終えての、学生の皆さんの感想を一部紹介します。

＜第二次試験を終えての感想①＞

教職特別講座を受講してきて、これまで先生にいただき学んだ資料は小六法よりも分厚いほどの量になり、学びを書き留めたノートは４冊分になりました。

私が最初にこの講座を受講してきた意義を感じたのは、教育実習で、中学校の先生が「教師の基盤ができているね、きっといい先生になるよ」と言ってくださり、私の生徒に対する表情や言葉の掛け方を評価してくださったときでした。この講座を通して、教員として謙虚に学び続ける姿勢や生徒一人一人に誠実に向き合うことの大切さ、その職務の責任や使命の重さを、体に沁み込ませるように学んできたことが、自分の言動として自然に表れたのではないかと思うと、自信が持て、本当に講座を受けることができてよかったと思いました。教員になる準備として自分が講座を通して身に付けるべきだったことは、この「教師の基盤」だったのではないかと思います。この講座を通して得た学びは、確実に自分の力になっていると実感することが出来ました。そして、一つ考えるのは、「講座で学んだ」と今の私が思っていることは、現場に出て実際に教員として働き始めた時に、改めて形を変えて、実感や納得を伴いながら、別の形で自分を鼓舞する存在になるのではないかということです。先日、中学校で働く、昨年卒業した友人と電話をして、この講座で学んだことは「現場に出てから分かることがたくさんある」という話をしてくれました。やはり、実際に先生になってからでないと本当の意味で理解できないことがたくさんあり、これから現場に出て働く中で、この講座での学びや曽我先生のお話の意味が、今よりも確かな形を持って深く理解でき、また気を引き締められるような瞬間が訪れるのではないかと思っています。来春から、その瞬間を求めながら、情熱と使命感を絶やすことなく、いつまでも学び続ける教員になりたいと思います。（次頁に続く）

最後に、この講座で共に同じ夢を持って学び、回を追うごとに関係を深め、本番まで励まし合い、たくさんのアドバイスをくれた仲間たちには心から感謝したいです。これから卒業まで、そして卒業後も今と同じように互いを鼓舞し合える存在で居たいです。

曽我先生、約１年間もの間、毎回の資料のご用意、丁寧な解説、教職への思いが高まる説話や先生のご経験談、あたたかい励ましのお言葉を本当にありがとうございました。この講座で備えて頂いた「教師の基盤」に、これから時間をかけて経験と学びを積み上げていきたいと思います。本当にありがとうございました。

＜第二次試験を終えての感想②＞

曽我先生、これまで大変お世話になりました。私に関しましては、一昨年の１０月の一次対策から始まり、留学を終えてまた対策講座に参加させてもらい、８月の二次試験へ向けご指導いただいたこと、誠に感謝申し上げます。

二次試験について、全力を出し切って受験することができたと思います。個人面接に関しては、曽我先生と演習していた内容がほとんどであり、あまり緊張することなく受けることができました。ただ、後からこういえばよかったと思った回答もあり、悔しかったです。日本語のグループ討論に関しても、自分の意見に加え、これまで演習してきたなかで、他のメンバーが発言していた内容も思い出しながら、笑顔で相づちをしながら話すことができたため、改めて曽我先生がこれまでされてきた講座のやり方、意義というものを実感することができました。４人で討論をしたため、発言時間が多く、私の言いたいことは全て言い切れたと感じています。英語の討論に関しては、６人もいたのであっという間に２０分が過ぎていき、もう少し発言をしたかったと思いました。

試験対策として講座を受けるだけでなく、日々の演習を通して教職に対する理解を深めることができました。曽我先生の講座を受けることができ、本当に良かったと感じております。私たちのために一生懸命に取り組み、向き合ってくださる曽我先生の想いが伝わり、私自身もさらに頑張らなければという気持ちになりました。曽我先生は、教育者としての使命感と情熱にあふれており、目指すべき姿であると実感することができ、私もこのように常に生徒を想い、寄り添う教員になりたいと感じました。本当にありがとうございました。

＜第二次試験を終えての感想③＞

私は、これまでの特別講座で考えを深めてきたことについて、面接試問やグループディスカッション、模擬授業や場面指導の演習をする中で、教職に対する理解を一層深めることができたと感じています。また、すぐに挫けてしまいそうになる自分自身の課題に向き合い、自己理解を深めながら、成長することができた貴重な時間であったと思っています。

面接演習を始めた当初は、うまく答えることができず、不安や焦りを感じていました。しかし、毎回丁寧に時間をとってご指導をしていただいたこと、他の学生の面接やその回答を聞くことができたことによって、だんだんうまく自分の考えを整理しながら、言葉にできるようになっていきました。

本番、面接の試験を受けて感じたことは、「これまで頑張ってきて良かったな」ということでした。もちろん、もっと講座の中で頑張れた部分もあったと思いますが、面接官に質問されて自分が回答するその言葉の中に、しっかりと「これまでの講座で考えてきたことがある」、「積み重ねてきたことが自分の中にある」のだということを実感しました。これまで、みんなでディスカッションをして話し合ってきたこと、面接試問でどのように答えたらいいのか先生に質問しながら学び考えてきたこと、このような経験の中で、教師としての教育的愛情や使命感、教師にとって大切なものをしっかり感じ取りながら、自分自身の考え方も、アップデートしていくことができたのではないかと思います。本番の面接試問は、もっと自分のことをアピールできたのではないかと少し悔しい気持ちがあります。しかし、質問の中には、学んできたことをしっかり伝えられたところもあったと感じています。結果はどうなるかわかりませんが、この特別講座で学んだことや経験したことは、

（次頁に続く）

今後の教職人生でも必ず役に立つことであり、困ったときに自分を支えてくれるものであると思います。これからもさらに教職についての理解を深めつつ、講座を受けてきたのだと自信を持って自己実現ができるよう励んでいきたいと思います。本当にありがとうございました。

＜第二次試験を終えての感想④＞

◇　教員採用選考試験を受験しての感想

当日は楽しんで受験をすることができました。結果はまだわかりませんが、これまでの積み重ねを十分に発揮できたと感じています。悔いはありません。講座で丁寧にご指導いただいたおかげで、試験当日は「ここまでやったんだから、大丈夫」と自信を持って臨むことができました。模擬授業は受験時点でのベストパフォーマンスだったと自負していますが、さらに高める余地はあると感じました。受験を乗り越えたことで、自信もつきましたが、苦手なことや改善すべきところも見えてきたので、教員になるまでの残り半年ほどでその点と向き合っていきたいです。

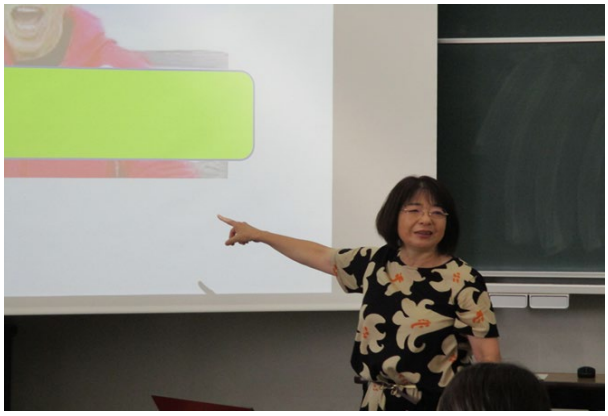
◇　これまで特別講座を受講しての感想

知識や技術という点は勿論ですが、教職への理解やモチベーションという点で講座の存在は大変大きいものでした。最初の面接演習ではほとんど答えることができませんでしたが、演習を重ねていくうちに、自然と回答が出てくるようになりました。また、他の方の面接を観察することや、その後の質問の時間も大変参考になりました。１０月からご指導いただいていた講座はあっという間でもありましたが、長い道のりでもありました。自治体も校種も全く同じという方はいなかったため、不安もありましたが、それぞれが自身の試験に向けて取り組んでいる姿は大変刺激になりました。また、試験内容が異なるにも関わらず、模擬授業などについて他の受講者の方が真剣にアドバイスを出してくれたことがとても支えになりました。さらに、討論などに参加したことで教職に対する理解がより深まりました。お互いに支え合うという関係性ができている環境が、とても受験にあたってプラスになりました。曽我先生をはじめ、そのような雰囲気をつくっていただいた受講生の方にはとても感謝しています。教職への理解という点では、一次試験へ向けた演習で身に付けた基礎力を、応用するような形で進めていったことで、より理解が深まりました。この理解は試験だけではなく、教職に就いた後も役立つものになるというように感じています。試験は終わりましたが、教員になってからも講座での学びを活かし、発展させていきたいと考えています。

教職課程授業「教育実習事後指導」へのご支援
外部講師の先生方に感謝！！！

７月２４日（木）、教職課程授業「教育実習事後指導」において、外部講師として、２名の先生をお迎えし、教職の魅力や課題等について講話をしていただきました。２名の先生は、
宮崎市立東大宮中学校　遠目塚由美（とおめづか　ゆみ）先生
元宮崎県立宮崎大宮高等学校　渡部祐一（わたなべ　ゆういち）先生　です。

当日は、中学校、高等学校の２つのグループに分かれ、中学校：遠目塚由美先生、高等学校：渡部祐一先生に担当していただき、充実した時間となりました。特に教育の本質に迫る講話は、学生の皆さんにとって、大変貴重なものとなりました。２名の先生方、お忙しい中、本当にありがとうございました。心から感謝申し上げます。



＜遠目塚由美先生＞

＜渡部祐一先生＞

学生の皆さんの感想の一部を紹介します。

＜中学校＞

本日、貴重なお時間をいただき、約３５年にわたり教職に携わってこられた遠目塚先生の講演を拝聴する機会を得た。これまでにないほど実感と熱意に満ちた「生の声」を聞くことができ、非常に刺激的で有意義な時間だったと感じている。まず、最初に講演を終えての率直な感想として、先生の話し方には人を惹きつける大きな魅力があると感じた。講演の導入では、ロックバンドの楽曲を流して開始され、思わずこちらも姿勢を正し、自然と集中して聞き入ってしまった。これまで、授業や講演の冒頭でこのような演出を行う教師に出会ったことがなかったため、非常に新鮮で、印象に残っている。また、講演全体を通して、生徒（＝今回は我々大学生）に語りかけるような、言葉のキャッチボールを意識した話し方が一貫していて、９０分間が本当にあっという間だった。終始、一方的に情報を伝えるのではなく、こちらに問いかけたり、考えさせたりする工夫が随所にあり、「こういう授業なら、きっと生徒も自然と前のめりになるだろうな」と感じた。特に印象的だったのは、先生が講演の中でいくつもの道具を持ち込んでいた点である。関節人形などの視覚的に面白いツールをはじめ、授業内で直接使われたわけではないが、さまざまな道具が準備されていた。それらを見ただけでも「何か面白いことが始まるのではないか」と感じさせる雰囲気があり、生徒の興味を引き出す工夫が徹底されていることに感銘を受けた。授業という場の空気づくり、雰囲気の演出もまた、教員に求められる重要な能力のひとつであると実感した。そして、先生が掲げていた中学校英語教育の三つの目標、「①英語を楽しむ経験、②英語を使って感動する経験、③そのための英語力を身につけること」は、まさに体験を重視する現代的な教育観を反映していると感じた。知識を「覚える」ことから、「使う」「感じる」「つながる」ものへと

シフトさせていく。そのためには、教員自身がワクワクしながら授業を組み立て、生徒の好奇心を喚起する必要がある。中でも、最も心に残ったのが、「自分自身が授業をしていてわくわくするかどうかが一番大切」という先生の言葉だった。これは、教員としての原点でありながら、実は簡単なことではない。日々の忙しさや課題の中で、教師自身が授業を惰性でこなしてしまうこともあるかもしれない。だからこそ、「自分が楽しめる授業」を意識して作り続ける努力こそが、生徒に本当の学ぶ楽しさを伝える鍵になるのだと強く思った。また、講演の中で紹介された”Think、Pair そして Share”のようなアクティブラーニングの手法も印象的だった。これは、個人で考えた後にペアで意見を共有し、最後にクラス全体で考えをシェアするというシンプルながら効果的な学習活動である。私自身も大学のゼミなどでこの手法を体験したことがあるが、他者の考えを聞くことで視野が広がり、学びが深まる感覚があった。中学生にとっても、自らの意見を持ち、他者と共有し合う経験は、思考力・表現力・対話力の育成につながると感じた。

＜高等学校＞

外部講師である渡部先生の講話を通して、私は「今の時代に求められる教員の姿」について改めて深く考えさせられた。特に、心に残っているのは、「教師は“伝えていく仕事”である」という先生の言葉だった。ただ知識や情報を教えるだけではなく、どれだけ生徒の心を動かせるか、どのような感情や気づきを引き出せるか。そういった“心に届く教育”の在り方に強く共感した。

教育とは、単なる知識の伝達ではない。生徒の心に火を灯し、自ら学ぼうとする意欲を育てる営みだということである。その言葉に触れて、私は「教える」という行為の奥深さに気づかされた。そして、「脱線は決して無駄な時間ではなく、むしろ有意義な時間になりうる」という先生の考えにも驚かされた。私はこれまで、授業は計画通りに進めることが大切だと思い込んでいたが、生徒の興味や疑問が生まれたその瞬間こそが、もっとも自然な学びのタイミングであり、そこにこそ教育の本質があるのだと気づいた。

また、「引き出し（インプット）を増やすことが第一」という考え方も印象に残っている。知識や経験、興味の幅を持つことは、ただ授業内容の質を高めるだけでなく、生徒との対話のきっかけにもつながる。教員自身が多様な視点を持ち続けることで、生徒の問いに柔軟に応えたり、新たな視点を提示したりできるのだと思う。これは、実際に私が教育実習を通して強く実感したことでもある。

講話の中で、渡部先生が「保護者は仲間であり、良好な人間関係を築くことが大切」とおっしゃっていたことも、私にとって大きな気づきだった。私は正直、保護者対応にはどこか身構えてしまうところがあったが、「子どもの成長を共に支えるパートナー」という視点に触れて、その意識が大きく変わった。また、「学校の先生とは次の世代を育てる仕事である」という先生の言葉には、教育という営みに対する誇りと責任の重みが込められていたように感じた。そして、「やれることを、やれる人がやればいい」という考え方からは、すべてを一人で背負うのではなく、周囲と支え合いながら取り組んでいくことの大切さを学んだ。

最後に、私の心に深く残ったのは、渡部先生の「“好き”にならなくていい、でも“嫌い”にはなるな」という言葉である。これは、多様性が重視されている今の社会で、生徒にも伝えていくべきことだとは思うが、自分自身にも強く言い聞かせていきたい言葉である。どの生徒に対しても否定や拒絶の気持ちを持たず、存在を尊重する姿勢を持ち続けることが大切なのだと感じた。これは、生徒との関係だけでなく、保護者や同僚、社会の中での人との関わりにも通じる考え方であり、教員としての在り方そのものに深く関わるものだと思う。

今後、私は、教科の知識だけでなく、人としての姿勢や心を磨き続け、生徒一人ひとりの個性を大切にしながら、共に歩んでいける教員を目指していきたい。講話で得た気づき、そして教育実習での学びを忘れずに、自分自身の“引き出し”を増やしながら成長していきたいと強く思う。

道徳の教科化に思う！（シリーズ１００）

平成２９年の６月号から、「道徳の教科化に思う」をテーマに、道徳授業の本質的な在り方等について連載しています。

今回は、７月号からスタートしたテーマ「生きる力をはぐくむ道徳授業の創造～発問や教材（資料）選択を児童にゆだねる道徳の時間の指導の在り方～」の３として、「研究の実際その２：一つの内容項目についての複数時間配当する道徳の授業計画」について掲載します。

シリーズ「道徳の教科化に思う」も、今回で１００回を数えることとなりました。これまで、道徳授業の在り方等を中心に連載してきましたが、学校現場の先生の中には、研修資料として活用されている方々がいるなど、担当者としてとてもありがたく思っています。

今後も本学の学生とともに、学校現場の先生方にもお役に立てるよう、本シリーズの充実に努めていきたいと思います。

＜一つの内容項目についての複数時間配当する道徳の授業計画＞

１　指導計画作成の工夫

(1)　一つの内容項目について、年間に複数時間配当する場合の年間指導計画上の位置付け

(2)　複数時間をひとまとまりと考えての各時間の性格付け

(3)「ねらい」と児童の活動を中心とした学習方法の位置付け

２　一単位時間の性格付け

(1)　指導計画における特質に基づく一単位時間の弾力的運用

ここまでの内容を、先月号（８月号）に掲載しました。

◇◇

２　一単位時間の性格付け

(2)　一単位時間の弾力的運用に基づいた児童の活動と教師の支援の在り方

３０分、４５分、６０分による一単位時間の弾力的運用を図るが、それに伴い児童の活動や教師の支援を具体化すると次のようになる。

＜児童の活動１＞自分で学習したい教材を選択する活動（３０分）

①　教材を読む。

②　学習したい教材を選択する。

③　選択した理由をまとめる。

＜教師の支援１＞

◇　ねらいに沿った教材を複数提示する。

◇　教材における道徳的価値の関連を明らかにする立場から分析する。

◇　選択した理由をまとめるためのワークシートを用意する。

＜児童の活動２＞
　それぞれの教材の主人公の気持ちや考えについて整理し、それに対する自分の考えをまとめる活動（４５分）
①　主人公の気持ちや考え、行動の仕方について整理する。
②　これまでの生き方をもとに、主人公の生き方から考えたことをまとめる。

＜教師の支援２＞
　そのときの状況、行為への迷い、行為への動機、行為の中の考え方（気持ち）、行為の後の気持ち、主人公の行為に対する自分の感じ方についてまとめるためのワークシートを用意しておく。

＜児童の活動３＞
　自分の考えを発表したり、他の考えを聞いたりする活動（６０分）
①　同教材グループで自分の考えを出し合う。
②　全体の場で考えを発表したり、質問したりする。
③　学習を通しての感想を書く。

＜教師の支援３＞
○　グループでの話合いが、自分たちの力で進められるよう話合いの視点を示唆する。
○　全体の場で発表したり、質問したりできるよう、自分の考え方の変化、疑問に思ったこと、他教材への質問などについて事前にまとめさせておく。